

## 第2章 これまでの取組と課題

### 1 第一次計画の取組

#### (1) 基本目標

第一次計画では、いちはらの子ども一人ひとりが、自ら読書の楽しさ、素晴しさを発見し、いつでもどこでも読書ができるよう、その環境の整備を図ることを基本理念とし、その実現に向けて次の3つの基本目標を定めました。

##### ◆ 基本目標

- I 子どもが読書に親しむ機会の提供と環境の整備
- II 連携による読書活動の推進
- III 子どもの読書活動に関する理解と関心の普及

#### (2) 取組と成果

基本目標を柱として計画を体系化し、子どもの読書活動推進のための様々な事業を実施してきました。基本目標ごとの主な取組と成果は、次のとおりです。

##### 基本目標 I 子どもが読書に親しむ機会の提供と環境の整備

###### ① 家庭における子どもの読書活動の推進

ブックスタート事業※<sup>1</sup>（配布8, 695人※<sup>2</sup>）や家庭教育学級※<sup>3</sup>の開催（延べ22学級）、保育所・幼稚園・小中学校を通じた保護者への情報提供等を行い、家庭での読書習慣づくりを推進しました。

###### ② 地域における子どもの読書活動の推進

図書館利用案内の配布（全小学校1年生）、市内読書施設※<sup>4</sup>や児童館※<sup>5</sup>におけるおはなし会・読み聞かせの実施（参加28, 154人）や講座・講演会の開催（参加2, 679人）、児童図書や青少年図書の整備（購入31, 288冊）等を行い、本とのふれあいや読書活動に関する知識を深める機会を積極的に提供するとともに、読書環境の整備を推進しました。

###### ③ 学校における子どもの読書活動の推進

小中学校における全校一斉読書活動の普及や、全小中学校への読書指導員の配置（基本として小中学校2～3校を兼務）、小中学校の学校図書館における図書資料の整備（購入62, 142冊※<sup>6</sup>）等を行い、学校における読書習慣づくりや読書環境の整備を推進しました。

※<sup>1</sup> 乳幼児検診の機会に、赤ちゃんと保護者に対し、親子で一緒に絵本を楽しむことの大切さを伝えながら、絵本を手渡す運動

※<sup>2</sup> 第一次計画期間中の平成18年度～21年度（4年間）の実績。以下の実績数値も同じ

※<sup>3</sup> 保護者が共に考えあいながら、子どもを取り巻く諸問題や家庭教育のあり方などについて学習する場として、小中学校に家庭教育学級を開設。保護者が中心となって運営委員会を組織し、自ら企画した学習を年間を通して計画的、組織的に学習する。

※<sup>4</sup> 中央図書館・公民館図書室・コミュニティセンター図書室

※<sup>5</sup> 児童福祉法に規定する児童厚生施設。菊間・姉崎・三和の各保健福祉センターに併設

※<sup>6</sup> 第一次計画期間中の平成18年度～20年度（3年間）の実績

## 基本目標 II 連携による読書活動の推進

### ① 中央図書館を中心としたネットワークづくり

資料の団体貸出<sup>※7</sup>（延べ1,600団体・128,850冊）や学校ボランティアへの研修（参加116名）、小中学校との連絡会議、読書ボランティアへの研修会・講習会を開催したほか、中央図書館では、学校や読書ボランティア・市民団体等を支援するなど、連携の強化を推進しました。

### ② 行政における推進体制の整備

市内読書施設の図書担当者による連絡会議を開催し（年5回）、読書施設間の連携強化を推進しました。また、小中学校において児童・生徒の読書活動に関する調査<sup>※8</sup>を毎年定期的に実施し、活動状況を把握して、計画の進行管理に活用しました。

## 基本目標 III 子どもの読書活動に関する理解と関心の普及

### ① 広報・啓発活動の推進

市内読書施設や小中学校における「子ども読書の日<sup>※9</sup>」・「読書週間」行事への取組（参加3,862人<sup>※10</sup>）や、各種の講座・講演会の開催、読書感想画の募集（応募779点）、中央図書館ウェブサイトの充実、図書館だよりの配布等を行い、広く市民に対して読書活動の意義や重要性を周知し、社会全体で読書活動を推進する機運を高めました。

### （3）取組に係る課題

未就学児に対する各種の取組は、公立・私立の各幼稚園・保育所（園）や保健福祉センター児童館、また、地域の読書ボランティアや子育てボランティアの方々によって、幅広い活動が行われています。

しかしながら、第一次計画の取組では、中央図書館とこれら関係機関・団体との連携は十分とは言えない面があります。

幼い頃からの読書習慣の形成は、生涯にわたる読書活動の基盤となることから、日常的に本に接する機会を与え、その楽しさや喜びを知ることで、読書習慣が身に付くよう働きかけていくことが必要です。

本計画においては、これら未就学児に係る各関係機関等との連携強化を図っていく必要があります。

## 2 第一次計画の指標

### （1）指標

第一次計画では、施策の全体的な効果を測るために、次の3つの指標を定めました。

#### ◆ 指標

- 1 1ヵ月に1冊も本を読まない児童・生徒の割合
- 2 保護者やボランティアの協力体制づくりを行っている小中学校の割合
- 3 学校行事として読書活動推進のための取組を実施している小中学校の割合

<sup>※7</sup> 学校や地域の読書活動を支援するため、中央図書館で行っている図書貸出制度。登録団体は、幼稚園・保育所（園）・小中学校・学童保育・地域文庫・その他官公署等

<sup>※8</sup> 小中学生の読書の状況に関する調査（市教育委員会指導課調べ）

<sup>※9</sup> 毎年4月23日。「子どもの読書活動の推進に関する法律」（平成13年12月）の施行に伴い定められた日

<sup>※10</sup> 中央図書館事業「いちはらっ子読書フェスタ」（春）・「子ども読書活動推進フォーラム」（秋）の参加者数

## (2) 指標の達成状況

### 指標 1

1ヵ月に1冊も本を読まない児童・生徒の割合 <毎年5月(22年度10月)の読書冊数ゼロの割合>

小中学生の読書の状況に関する調査（市教育委員会指導課調べ）

※全国平均：学校読書調査（毎日新聞社・(社)全国学校図書館協議会）

#### ●小学生（4～6学年）

	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	努力目標
市原市	2. 4%	1. 8%	3. 0%	1. 3%	2. 3%	1. 4%	1. 9%
全国平均	5. 9%	6. 0%	4. 5%	5. 0%	5. 4%		

平成17年度2. 4%を平成22年度1. 9%まで減らすことを目標とし、5年の間に増減を繰り返しましたが、平成22年度調査では1. 4%となり、努力目標を達成しました。

なお、全国との比較（平成21年度まで）では、全国平均が概ね5%台で推移しているのに対し、常にこれを下回る（割合が少ない）結果となっています。

#### ●中学生（1～3学年）

	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度	努力目標
市原市	18. 0%	14. 4%	12. 3%	15. 9%	14. 8%	15. 4%	13. 9%
全国平均	24. 6%	22. 7%	14. 6%	14. 7%	13. 2%		

平成17年度18. 0%を平成22年度13. 9%まで減らすこと目標としていましたが、5年の間に増減を繰り返し、平成19年度において一時的に努力目標を達成したものの、平成22年度調査では15. 4%と、平成17年度の数値は下回りましたが、努力目標については達成できませんでした。

なお、全国との比較（平成21年度まで）では、全国平均は減少傾向で推移してきており、平成20年度以降は本市がこれを上回る（割合が多い）結果となっています。

### 指標 2

保護者やボランティアの協力体制づくりを行っている小中学校の割合

学校図書館の現状に関する調査（文部科学省初等中等教育局児童生徒課調べ）

<平成21年度は実施なし（隔年実施に変更）>

※平成22年度：「子どもの読書活動に係る学校アンケート」（市中央図書館調べ）

	17年度	18年度	19年度	20年度	22年度	努力目標
小学校	91. 3%	95. 6%	95. 6%	95. 6%	100%	100%
中学校	9. 5%	9. 5%	9. 5%	9. 5%	23. 8%	33. 3%

小学校においては、平成17年度91. 3%を平成22年度100%とすること目標としていましたが、平成21年度以降体制づくりが進み、平成22年度において努力目標を達成しました。

中学校においては、平成17年度9. 5%を平成22年度33. 3%とすること目標としていましたが、学校図書館の運営面での課題等もあり体制づくりが進みませんでした。平成21年度以降に実施校が3校増え、実施割合も上昇しましたが、努力目標の達成には至りませんでした。

**指標 3****学校行事として読書活動推進のための取組を実施している小中学校の割合**

学校図書館の現状に関する調査（文部科学省初等中等教育局児童生徒課調べ）

&lt;平成21年度は実施なし（隔年実施に変更）&gt;

※平成22年度：「子どもの読書活動に係る学校アンケート」（市中央図書館調べ）

	17年度	18年度	19年度	20年度	22年度	努力目標
小学校	73.9%	84.4%	97.8%	100%	100%	100%
中学校	38.1%	38.1%	38.1%	81.0%	100%	100%

小学校においては、平成17年度73.9%を平成22年度100%とすることを目標としましたが、平成20年度において全校実施となり努力目標を達成しました。

中学校においては、平成17年度38.1%を平成22年度100%とすることを目標としましたが、平成20年度に実施校が一気に9校増え実施率が上がり、平成22年度において全校実施となり努力目標を達成しました。

## ※ 学校行事としての読書活動推進のための取組

「全校一斉の読書活動＜始業前・授業中等＞」・「図書の読み聞かせ」・「ブックトーク」・「必読書コーナー・推薦図書コーナーの設置」・「目標とする読書量の設定」・「家庭への読書活動支援＜親子読書会等＞」の取組のうち全部又は一部を実施

**(3) 指標に係る課題**

小中学校が主体となって行う読書環境の整備（指標2・3）については、おおむね目標を達成しましたが、これらの取組の成果が反映される不読率（指標1：本を読まない児童・生徒の割合）については、小学生については目標を達成しましたが、中学生については達成できませんでした。

また、本市を含めた全国的な傾向として、中学生の不読率が小学生を大きく上回っています。

このような状況を改善するためには、学校における取組だけでなく、様々な取組を総合的に行うことでの効果が表れるものと考えられます。したがって、今後も継続して各種の事業を展開していくとともに、学校と中央図書館との連携をさらに強めていく必要があります。

**3 本市における子どもの読書活動の状況****(1) 1カ月あたりの読書量 <毎年5月の読書量（読んだ本の平均冊数）>**

小中学生の読書の状況に関する調査（市教育委員会指導課調べ）

※全国平均：学校読書調査（毎日新聞社・(社)全国学校図書館協議会）

## ●小学生（4～6学年）

	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
市原市	8.8冊	8.5冊	8.6冊	9.6冊	9.2冊	8.4冊
全国平均	7.7冊	9.7冊	9.4冊	11.4冊	8.6冊	

## ●中学生（1～3学年）

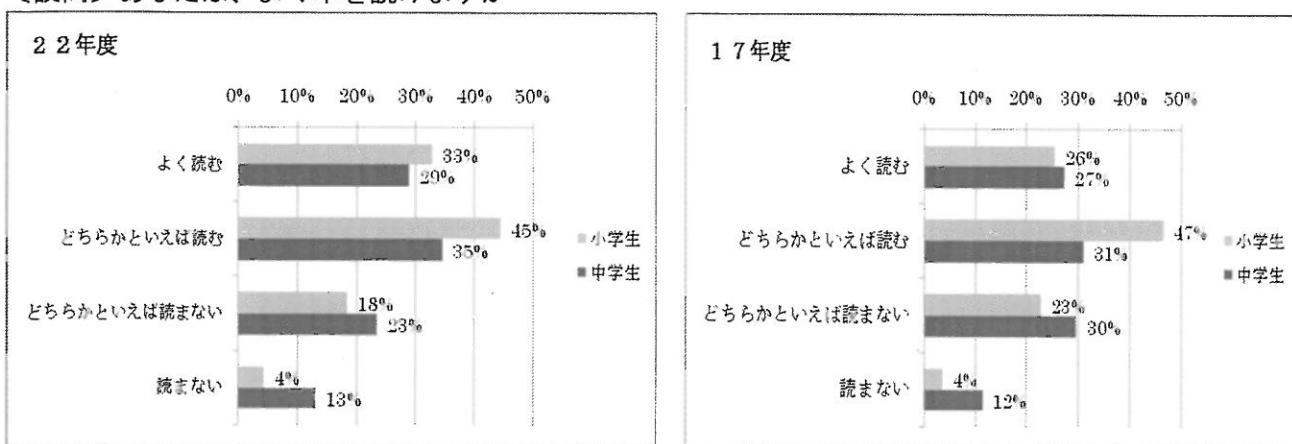
	17年度	18年度	19年度	20年度	21年度	22年度
市原市	2.3冊	3.2冊	2.9冊	2.8冊	3.4冊	3.3冊
全国平均	2.9冊	2.8冊	3.4冊	3.9冊	3.7冊	

1カ月あたりの読書量に関する調査では、小学生が平成17年度8.8冊から平成22年度8.4冊に、中学生が平成17年度2.3冊から3.3冊となっており、年度によって変動があるものの、大幅な増減は見られず、ほぼ全国平均レベルで推移してきています。

## (2) 読書量に関する認識<設問「よく本を読むか」に対して>

小中学生の読書についてのアンケート（市教育委員会中央図書館調べ）

[設問] あなたは、よく本を読みますか



「よく読む」・「どちらかといえば読む」の割合は、小学生の78%に対し中学生は64%であり、中学生になると本を読まなくなる傾向がうかがえます。

前回調査（平成17年度）では、「よく読む」・「どちらかといえば読む」の割合は、小学生が73%、中学生は58%であり、小学生・中学生ともに本を読むと認識している割合は前回調査より増加しています。

## (3) 子どもの読書活動の状況に係る課題

1ヶ月の読書量に関する調査では、中学生において若干の増加が見られるものの、大幅な数値の向上は見られないことから、様々な取組を総合的・計画的に行い、子どもの読書習慣づくりを推進していく必要があります。

また、読書量及び読書量に関する認識から読み取れることとして、指標の項でも述べたように、小学校から中学校へと学校段階が進むことで「読書離れ」が進むことも大きな課題です。中学生になると急激に読書から遠ざかってしまうことは、本市のみならず全国的な傾向として表れています。

学校段階が進むにつれ、子どもたちは習い事や塾、部活動や家での勉強等で「いそがしく」なっています。また、ゲームやインターネット、携帯電話などの情報メディアに接する機会が増え興味も移っていきます。このような状況の中で読書の比重を高めていくことは大変難しいことですが、機会をつくりて読書の楽しさや意義をアピールしていくとともに、これから成長する子どもたちに対しては、幼児期から日常的に本に接する機会を与え、その楽しさや喜びを知ることで、生涯にわたる読書習慣が身に付くよう働きかけていくことが必要です。

さらに、同じく全国的な傾向として、子どもの読解力の低下についても国が指摘しています。

OECD（経済協力開発機構）が、2000年から3年毎に加盟国の15歳の生徒を対象に実施している「OECD生徒の学習到達度調査」では、当初の8位から14位、15位と低下傾向にあった読解力（自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力）の国際順位が、2009年には再び8位と回復しましたが、一方では単純な読み書きが得意な反面、関係性を理解した解釈や自らの知識・経験と結びつける力が弱いとの新たな課題も指摘されています。

国の調査研究でも、読書習慣がある子どもほど読解力が優れている傾向にあることから、今後とも読書量の向上とあわせ、読解力の向上に効果のある読書、すなわち論理力や思考をはぐくむような書物に親しむ機会を与えるなど、読書の「質」についても目を向けながら、子どもの読書活動の推進に取り組んでいく必要があります。

## 4 第一次計画における課題のまとめ

第一次計画の取組や指標の達成状況、子どもの読書活動の現状から、今後は特に以下の課題に対して一層力を入れていく必要があります。

### 【課題】

- 各発達段階に応じた読書習慣づくり
  - ・ 未就学児への働きかけの強化
  - ・ 小中学生の不読率の改善
  - ・ 中学生の読書量の向上
  - ・ 小中学生の読解力の向上

これらの課題は、各種の事業を総合的に行うことによってその向上が見込まれるものですが、各々単独で行う事業に加え、各関係機関が連携して多くの事業を行うことで、より高い効果が得られるものと考えます。

したがって、本計画では、特に中央図書館と各関係機関等との連携強化に重点を置き、第一次計画からの継続事業と新たな事業の相乗効果によって、これらの課題に対応し、子どもの読書活動の一層の推進を図っていきます。

### 【重点的な対策】

- 中央図書館と未就学児に係る各関係機関等との連携の強化
- 中央図書館と小中学校との連携の強化